美人特区® 鎌倉

Vol.2 2019/8/3

第1弾は、海を越えてガーナからお迎えした国分敏子さん

■今回はガーナで活動されている国分さんをお迎えしての対談の第2回目となります。どうぞお楽しみください！

アフリカ ～榎田のケニアでの緑化活動～

榎田：（映像）これね、僕がケニアで緑化活動をしていた時「粘土団子」っていうのを作ったんです。

国分：えー、本当だ（笑）

榎田：粘土団子は、この中に種が入っています。NHKワールドなんかでもこの活動は取り上げられたんですけど、自然農法の父として世界的に著名な、福岡正信さんという方から作り方を教えてもらったんです。簡単にいえば、自然の力にハマれば、お金もかからないよっていう話で。これ本当にすごいんですけど、粘土をふるいにかけて、クッキーとかパンを作る感じにふるって細かくして、それに種を入れて混ぜるの。種も現地の物で、外来種でない物を環境省のような所から購入して。まぜて、水入れて、練って、団子にして、自然乾燥するだけ。乾燥したらそれを蒔く。そうしたら、勝手に生えてくるんだけど、そのメカニズムが凄くて。水も肥料もいらないんです。何故かというと、ケニアは乾燥地帯ではあるけど、空気中には水分があります。その水分が昼夜の温度差で朝露となってが団子につくんですよ。その水分が粘土団子の中に入っていくんです。それが種にまで届くと、知らないうちに根が出る。粘土団子が崩れたら「芽が出た」ってわかるけど、実は芽が出る前に根がついてるの。大量に蒔くから、種の状態では虫や鳥は食べられない、動物も来ちゃうけど、動物も死んでしまうような環境だし、大量に蒔いたから（多くは残る）。

どうやって蒔いたかというと、みんな器用だなと思うんだけど、頭の上にカゴ乗せて、粘土団子入れて、歌いながら蒔くんですよ。わかるでしょ？

国分：はい、わかります！

榎田：その歌がね、讃美歌なんだよね。で、こうやって蒔くわけ。この写真（僕）良い人に見えるでしょ？（笑）

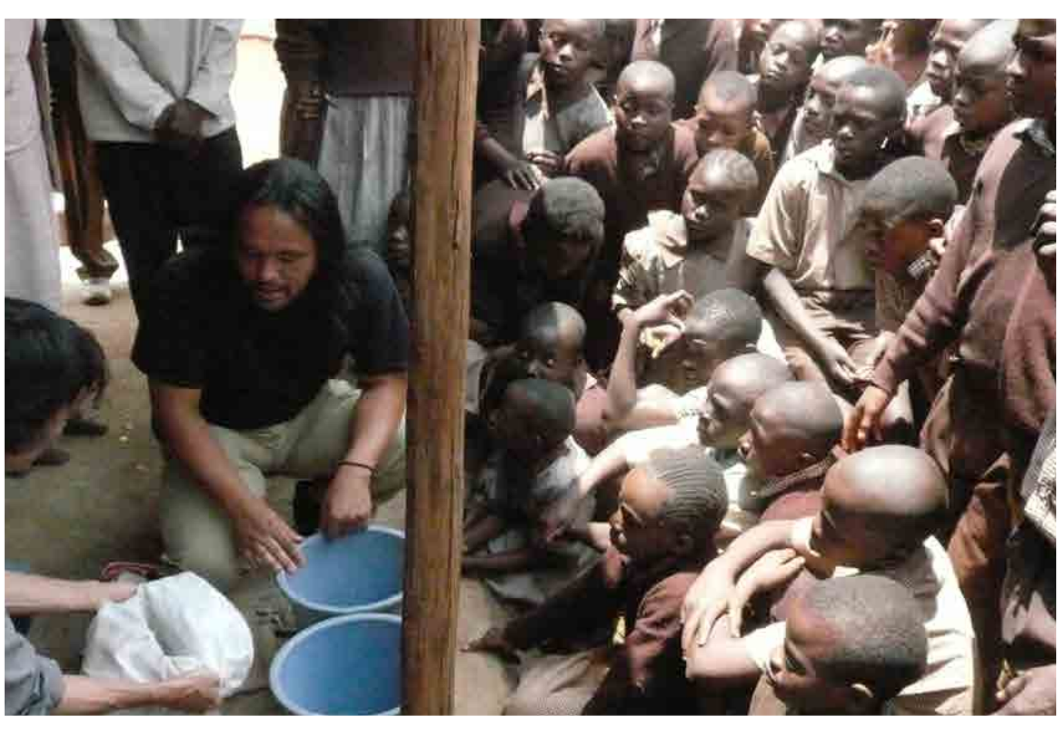
国分：あはは

榎田：これ別の場所なんだけど、15年前はアカシアの大森林地帯だったの。だけど、むこうは薪にしちゃうんだよね。

国分：そうなんですよ。

榎田：切ったら植えればいいんだけど、誰も教えないでしょ。普通に植樹するって大変なんですよ。穴を掘って、水をジャバジャバ入れて、手間かけてやっと根がつくんです。ケニアだと、まず、穴を掘った段階で二酸化炭素が出て、水をやり過ぎると塩害が起きる。物凄く大変なんです。だから乾燥に強い種類を植えないといけない。周りに草が生えてくれば生態系も戻ってきます。この活動を何年かやりました。半年経ったころ、大量に蒔い

を植えないといけない。周りに草が生えてくれば生態系も戻ってきます。この活動を何年かやりました。半年経ったころ、大量に蒔いた種が育ってきて、この一帯全部木が育ってきたんです。うまくいけば、実がなって、換金植物も植えられるようになる。でも、果実のなる木だけを植えてもだめなんです。まずは生態系のバランスを整えないと。それはどこの場所でもそう。結果的にこのプロジェクトは大成功しました。



（写真）ここはキベラ。ドブの臭いなんか、何十年ぶりに嗅いだって感じの場所です。酷い所でね、ビニールをずっと燃やしてるような臭いにやられてしまう。でも、ここに居たら何かしなきゃって思ってね。（国分さんと）

同じですよ。子供達を集めたんだけど、その目がね、真剣なの。だから、ここでも「粘土団子」の作り方を教えましたよ。

積み上がらない人たち

榎田：他の地域にも行きましたけど、1年経ってみると、誰も何もやってないの。わかりますよね？

国分：わかります。それ、すごくよくわかります。

榎田：「あれ、おかしいな。俺の教え方が悪かったかな」って思って、もう一回やってみました。そして1年後行ってみると、結果は同じ。お金になるのはわかっているんだけど、やらないの。6年続けてみて一向に変化がないから、悩んでね。どうして積み上がらないんだろうって。ずっと悩み続けてたんだけど、ある日、その理由が衝撃を持って僕の前に突きつけられた事件が起きたんです。僕はエチオピア料理が好きで、中目黒のブルーナイルというお店にたまに行ったりするんだけど、そう言えば、ケニアの伝統料理って食べたことないなと思って、ケニア人のスタッフに「ケニアの伝統料理食べたい」って言ったんです。そしたら、その日の夜に連れて行ってくれたんだけど出てきた料理が、フィッシュ&チップスと片栗粉溶いたようなビーフシチューぽい物とチャパティ。「これが僕達の伝統料理だよ」って出された時に「あ、彼らは記憶を消されている」と感じたんです。英国領だった時代に、徹底的に自分達の文化は消されたんだなと。六十何部族あるから、残っている所もあるとは思うけど、大多数が記憶を消されてる、つまり文化を消されてる。記憶が消されてたら、文化が乗りようがない。知識や経験が知恵として積み上がらない。ここは教育から始めないといけないんだと、6年経って気がつきましたね。だから、何故ものごとが続かないのかが理解できた。日本人の感覚で接していたから、文化の違いにやっとそこで気づいたんです。きっと、国分さんが同じようなことを感じていらっしゃるんじゃないかと思って、この話をしました。

国分：そうなんです。私が感じている「何故？」です。「お金を渡しているのに、何故2年間も放置されているの？」ということが最近もあって。

「感じる脳ー System1」の教育

榎田：「二重システム理論」というのがあって、人間の脳は、考える脳を主体としたSystem2と、感じる脳を主体としたSystem1があります。人間の発達過程で行くと、System1が先で、直立二足歩行になってSystem2ができてきたという話です。でも学校の勉強はSystem2が中心なんだけど、まずはSystem1がなければ、知識は乗らないということ。日本人にも勉強ができる子とできない子がいますが、その違いは頭が良いか悪かでなく、System1の部分、感じる力をどれくらい育てたかということ。それがとても大事。学童保育はそこが中心ですよね？戦後すぐは、System1がしっかりしていました。みんながそこら辺で遊んでいるし、缶ゴマなんかも自分たちで作って遊んでいたし、近代化されていないから、System1を育てる機能がありました。近代化と引き換えにSystem1が無くなってきた。ケニアなんかもっと酷くて、イギリスの近代化の為にめちゃくちゃになってしまった。じゃあ何をしなければいけないのかといえば、教育に力を入れないといけない。それは人間のSystem1を理解してやっていかないといけない。国分さんがガーナの子供達に「そろばん」を教えられていると聞いて、是非、美人特区®の第1回目に出演していただきたいという話になったんです。

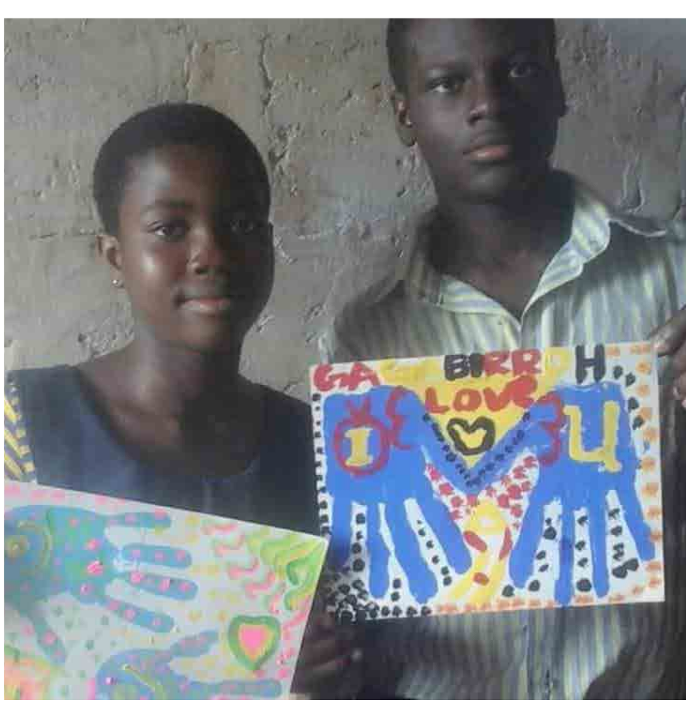
国分：そんなふうに思っていただけるなんて、本当に嬉しいです。

失敗を恐れる子供たち

国分：最近、母校の小学校で授業をした際に、校長先生から（国分さんの活動を）教職員を対象にして話してほしいと依頼を受けました。そこで、研修と言うほどのものではないけど、ガーナの教育事情と現在のガーナの子供と日本の子供に関して話をさせてもらいました。ガーナの子供達というのは、失敗をすることをとても恐れているんです。それは、すぐに先生が叩くから。

榎田：それはひどいね。

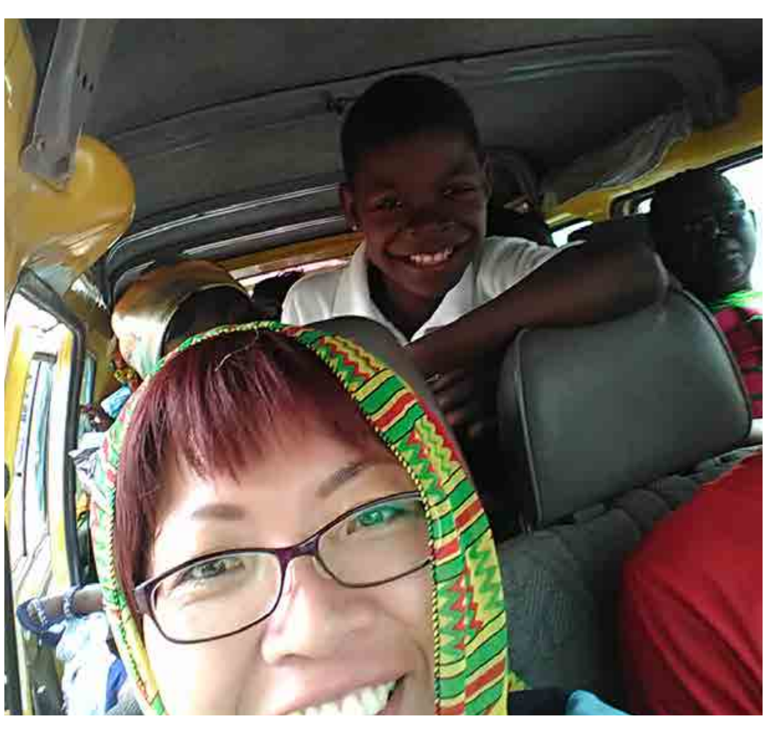
国分：例えば、木曜日は工作、手芸の授業をするんですけど、私とそっくりそのままを作らないと正解じゃないと思っています。必ず「トシコ、これでいいの？」と聞いてくるんです。「自由に作っていいんだよ！」って言うんですけど、何にしても正解を求めるんです。間違えることが許されないんですよね。



話が逸れてしまいますけど、先日の研修では、最近の小学校、中学校の先生が、生徒が失敗することを恐れているという話を聞きました。それは違う親からのクレームを恐れていると。それは違うよね。子供はやっぱり、失敗をしてどうして間違えてしまったのか、それを考えて学んでいくことが大事なんじゃないかという話をさせていただきました。私がガーナでやっているそろばん教室でも、間違えることが嫌だといって、カンニングが横行してたんです。今もそれがあるんですけど、かつてあまりにそれがひどい時期があって、親が使わなくなった携帯を机の中に隠して、それで計算をして答えを書く、同じプリントをやって、出来ている子がいればその子の答えを写して、という状況があった。何故、この子が急にこんなに正解率が上がったのかな？って思って。わかりますよね。そこで子供に問い詰めて確認すると、大きな瞳から涙をポロポロ流す子も。叱るというよりは腹が立ってきて、答案をビリビリに破いて「教室を出て行きなさい！あなた達は一生人の答えを写して生きるのか！」って怒鳴った事もあります。ガーナの子供達は間違えると罰を与えられる、日本の子供達は先生が失敗を恐れるから、子供たちにも失敗の経験をさせられない、というふうになっていると思う。今回の帰国で授業をした子供達に伝えたいメッセージは「失敗してもいいんだよ！それを学ぶことが大切なんだよ」ということ。私が小学校6年生の時になりたかった夢はマスコットを作ってお店で売る人だったけど、20年後の現在は違う事をしてるでしょ？寄り道だらけの人生だけど、自分のやりたい事をやっている人生なんだよ、ということを子供達に伝えました。子供だけでなく、先生や大人も日本全体が生きづらい世の中になっているから、失敗することが許されない。間違ったことを言うことも許されなくなっている。

コンプライアンスを気にする日本人

国分：最近やたらとコンプライアンスという言葉を聞くように。「国分さん、スプートニックはコンプライアンスってないんですか？」とガーナに住んでいる日本の駐在員の方に聞かれて、そもそもコンプライアンスって何だろう？そういうことを日本人は気にするんだな、と感じました。

榎田：（国分さん）どんぴしゃなことを言ってくれました。（美人特区®の）一番初めにこの方を連れてきてくれるなんて（同じく鎌倉塾世話人の伊勢田さん）天才ですね。

■次回は、日本の地域や企業の問題点について、そして〃女子力の正体とは！〃というテーマで対談の続きをお届けいたします。